



平成 28 年 2 月 16 日放送

骨粗鬆症性椎体骨折に対する新しい手術（BKP）について

県北医療センター高萩協同病院
整形外科科長 船山 徹

司会者：まず「骨粗鬆症性椎体骨折」とはどういった骨折ですか？

船山：お年寄りの方、特に高齢の女性に多いのですが体全体の骨がもろくなる骨粗鬆症という疾患があります。骨粗鬆症になると起きやすい骨折の代表の一つに、背骨の圧迫骨折があります。ちょっとした拍子に転んだり、しりもちをついたりしただけで背骨が潰れてしまう骨折です。最近はこの圧迫骨折のことを骨粗鬆症性椎体骨折と呼んでおります。

司会者：よく起きる骨折なののでしょうか？

船山：最新の論文では、70 歳女性の人口 10 万人あたり年間 1,100 人程度が病院を受診するくらいの痛みがあり、痛みがほとんどない椎体骨折まで含めると 70 歳女性の人口 10 万人あたり年間 4,000 人程度発生していると言われております。私が勤務している県北地域は高齢化が特に進んでおり、日常茶飯事に診る骨折です。私ども県北医療センター高萩協同病院の整形外科では 1 年間で約 100 名もの骨粗鬆症性椎体骨折の入院患者さんを治療しております。

司会者：痛みがある患者さんはどれくらいの痛みで病院にいらっしゃるのでしょうか？

船山：なんとか歩いて来院する患者さんも中にはいらっしゃいますが、通常腰や背中の痛みで歩けなくなり救急車でいらっしゃる患者さんが多いです。

司会者：どのような治療法があるのでしょうか？

船山：通常は保存治療といって手術以外の治療です。当院では 2 週間のベッド上安静の後にコルセットを着けてベッドから離れてリハビリを行う、という統一した方法で治療しております。

司会者：皆さんよくなるのでしょうか？

船山：約 80%の方が 1 ヶ月程度の入院で痛みがよくなりまた歩けるようになって退院していきます。

司会者：残りの20%の患者さんは？

船山：痛みが続いてしまいなかなか退院できなかつたり、一旦退院できたものの痛みが続いてしまい日常生活に制限が出てしまつたりしています。

司会者：そういった場合、痛みを取るためにどのような治療をするのでしょうか？

船山：以前は3ヶ月から半年くらい痛みをがまんしてもらつた上で骨折した背骨がどうしても癒合しない場合に限って、背骨にスクリューを入れて固定するといった大きな手術で対応しておりました。しかし2011年より本日ご紹介するBKP、正式にはバルーンカイフォプラスティが健康保険で認められた新しい手術方法として出来るようになりました。

司会者：BKPはどんな手術なのでしょう？

船山：対象となるのは骨粗鬆症性椎体骨折で先ほどお話ししたような保存治療を十分やっても痛みが続いている患者さんです。皮膚の切開は5mmほどのものが2カ所、出血はほとんど無く、30分から40分くらいで終了する非常に小さな手術方法です。実際には骨折した背骨に針を進めて中でバルーンといって風船のようなものを膨らまして潰れた背骨をもとの高さにもどし、そこに骨セメントという補強材を充填してきます。

司会者：手術すると痛みがよくなるのでしょうか？

船山：BKPの最大の利点はすぐに痛みが取れるという点です。これまで痛みで寝たきりに近い状態だった患者さんが手術の翌日には笑顔で座っていられるなんてことがよくあります。

司会者：高齢者でも手術は大丈夫なのでしょうか？

船山：全身麻酔は必要ですが、皮膚の切開もごくわずかで出血もほとんど無く短時間で終わるため、高齢者でも安心して受けて頂ける手術です。私どもの病院ではこれまでBKPを30例以上行ってきました。皆さんだいたい70歳台後半から80歳台が中心ですが、90歳を越える患者さんにも行った経験があります。

司会者：BKPは骨粗鬆症性椎体骨折であればどんな症例でも大丈夫なのでしょうか？

船山：骨折してから半年以上経過してしまったものや、骨折のタイプによってはBKPが出来ない症例もあります。レントゲンやCTやMRIなどといった精密検査で判断しています。

司会者：BKPは非常に小さい手術であることはわかりましたが、危険性はないのでしょうか？

船山：どんな手術でも100%絶対に安全というものは存在しません。BKPにもセメントが背骨から漏れ出てしまったり、そこから血管に詰まったりなど危険性がゼロではありません。しかし、バルーンを背骨の中で膨らませて出来た部分にレントゲンの透視装置を常時見ながら骨セメントを充填していくので、安全には非常に気を配っており危険性はとても低いと考えております。

司会者：BKPはどこの病院でも出来る手術なのでしょうか？

船山：まだ日本に導入されて間もない最新の手術法であるため、どこの病院でも出来る手術ではありません。整形外科の中でも脊椎を専門にしている指導医がさらにBKPのための専門のトレーニングを積んで初めてBKPの資格が与えられるため、茨城県内で手術可能な病院はまだ10施設程度に限定されております。まずは私のような背骨の専門医が安全な手術実績を積み重ねていくことで将来的にはもっと普及していくものと思われまます。

司会者：BKPは手術が終わればもう何もしなくてもよいのでしょうか？

船山：いいえ、そんなことはありません。BKPで骨折した背骨が補強されると、その一つ上の背骨に圧迫骨折が起きやすとも言われております。そのためBKPをやっても痛みが取れてもしばらくの間はしっかりコルセットを着けてもらいます。また、骨粗鬆症性椎体骨折の本来の原因である骨粗鬆症を治療していくことも大切です。

司会者：かならず骨粗鬆症の治療も必要なのでしょうか？

船山：最新の骨粗鬆症治療ガイドラインによると、骨粗鬆症性椎体骨折を起こした患者さんは骨密度検査などを行わなくても自動的に骨粗鬆症の薬物治療を開始する基準に該当します。これは、一度椎体骨折を起こすとまた違う箇所に椎体骨折を起こす危険性や、大腿骨の付け根の骨折を起こす危険性も上がるため、必ず何らかの骨粗鬆症治療を行い、骨折の連鎖をなるべく防ぐというのが狙いです。もちろん当院では骨密度検査や血液検査で骨粗鬆症の詳細な状態を把握してから薬物治療を開始しています。

司会者：骨粗鬆症の治療薬にはどのようなものがあるのでしょうか？

船 山：現在内服薬や注射薬まで様々なタイプの薬剤があります。内服薬も毎日 1 回飲むものから週に 1 回や月に 1 回のものであり、注射薬も毎日自分で注射するものから週に 1 回や月に 1 回や半年に 1 回病院で注射するものまで非常に多くの薬剤があります。しかし一番大切なのはどんなタイプの薬剤でもよいので継続していくことです。骨粗鬆症の治療の目的は将来の骨折予防と、もし骨折してしまったら次に連鎖的に起きる骨折の予防であるため、一見治療していても本当に効果があるのか分からず途中で自己判断でやめてしまう患者さんもいらっしゃいます。しかし骨折してから後悔しないように何らかの形で継続していくことをお勧めしています。

司会者：本日は骨粗鬆症性椎体骨折の保存治療から BKP という最新の手術方法、そして骨粗鬆症の薬物治療に至るまで詳しく説明していただきありがとうございました。

船 山：ありがとうございました。